

ちくまプリマーブックス57

Pencil Blues

鉛筆デッサン小池さん

長谷川集平



15
小池さん

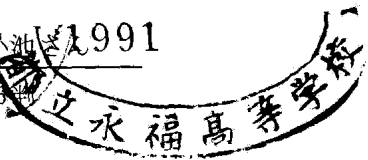
筑摩書房



財団法人日本科学協会

913/鉛筆デッサン/小池 1991

196pp/19cm/B6



長谷川集平 (はせがわ・しゅうへい)

1955年兵庫県に生まれる。武蔵野美術大学中退。絵本作家。著書に『はせがわくんきらいや』『トリゴラス』『絵本づくりトレーニング』『映画未満』などがある。

1991年9月10日 第1刷発行

著者 はせがわしゅうへい 長谷川集平

発行者 せきねひでさと 関根栄郷

発行所 ちくましょぼう 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4

TEL 03-5687-2680(営業)

5687-2670(編集)

振替 東京6-4123

装幀者 南 伸坊

三松堂印刷 積信堂製本

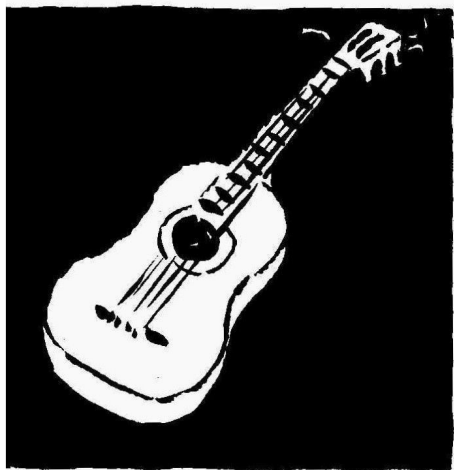
© 1991 S. Hasegawa

Printed in Japan

ISBN 4-480-04157-5 C8393

乱丁、落丁本の場合は、御面倒ですが、本社読者係宛に御送付下さい。送料本社負担にてお取替えいたします。

鉛筆デッサン小池さん



「オレたちは自分の持つてるメーターの針を、レッドゾーンより向こうに振り切ることが出来る人間、またゼロより向こうに振り切ることが出来る人間なんです。そういう感受性を持つています。針を振り切れないやつは、振り切れるやつのことを言うべきじゃないよ」

前田日明

酔^よつ払^{はら}った小池^{こいけ}さんに、おまえはオレの一番^{いちばん}弟子^{でし}だ、な、おまえはオレの一番^{いちばん}弟子^{でし}、
と言^いわれた。それで、うれしくてきのうの夜は部屋^{へや}に帰^{かえ}ってから、カップ酒^{さけ}で飲^のみ直^{なお}
した。

そのまま炬燵^{こたつ}で寝^ねてしまったらしい。汗^{あせ}かいた油粘^{ねんど}土^{つち}みたいにぶつつぶれてた。も
う二時^{ふたじ}すぎだ。めし抜^ぬきで研究^{けんきゅう}所^{じょ}に出^いたら、小池^{こいけ}さん、さっぱりした顔^{かお}で安生^{あんじょう}のデッ
サン見てた。

イーゼルの位置、きのうつけたしるしに合わせて、棚から画用紙を水張りしたB2のパネルを出す。ぼくはジョルジョの続きを描いた。小池さんは三、四人見た後こっちに来て「船木ちゃん、またまた遅いねえ」とみんなに聞こえるように言った。だれもクスツともしない。受験がすぐそこまでやってきている。次の、冬期講習会っていうコーナー曲がったら、あとはゴールまで一直線だ。板張りの、隙間風スカスカのアトリエは小型のガストーブ二個だけじゃぬくもらない。手と足の指先が冷たい。腹へった。

ぼくは小池さんを尊敬している。

小池さんは今はこんなシケた美大予備校（ウノ美術研究所と言うんだけど、スペイン語のウノ、ドスの一つって意味じゃなくて、ここを作って経営している宇野先生の苗字をカタカナで書いただけなんだ。中身は予備校というか、美大受験生専門の画塾ってとこだ。芸大合格者は何年かに一人ってペースだけど、地元のA芸大には毎年三、四人受かってる）

で燻くすぶってるけど、きっと近い将来注目される人だと思ふ。小池さんの絵は、どれもすごい。百号とか二百号の抽象画ちゆうしやうがもすごいし、デッサンやクロッキーもすごい。宇野先生よりも、他のどの講師よりもうまいと思ふ。小池さんの絵を知ってから、美術雑誌に載のってるプロの絵だっただけだ。たいしたことないって思ふようになった。すくなくとも日本のの若手に敵のはいないんじゃないかな。公募展こうほてんに出しては落とされるっていうけど、それはきつと審査員しんさゐんに見る目がないんだろう。洋画の世界ってコネで動うごいてるって言うし、古臭ふるくさい集まりだし、それで小池さんがちゃんと大学卒業してないことや、どの団体にも所属ぶしゆくしてないことなんかマイナス要素ようそになつてるのかもしれない。「顔の形合かたちあつてるか？ もう一度よく見ろ。鼻の線と首の線、比べてみな。角度かくど違ちがつてないか？」

ジョルジョを描えいているほくの頭の上で小池さんが言う。あ、やっぱり言われた通り角度かくど狂くるつてるわ。これ、オレの悪いクセだよな。垂直の基準線きじゆんせんを忘れちゃうんだ。

それで角度があいまいになるんだ。練りゴムくちやくちややって消す。

この白い石膏せっこうの胸像がルネサンスの彫刻家ドナテルロちようこくかの立像をもとにしたもんだってこと教えてくれたのも小池さんだ。ジョルジョという聖人の像だそうだ。小池さんはたとえば喫茶店きっさてんで時間つぶしてて話題がなくなった時なんか、ふっと思い出したようにこんな話をしてくれる。

聖ジョルジョ、ゲオルギウスとも読むね。英語のジョージってのが同じ名前だ。向こうの人の名前は聖人にちなんだものが多いからね。ビートルズのジョージ・ハリソンなんかもジョルジョから来ているわけだよ。カッパドキアというから今のトルコの出身だ。いろんな不思議な伝説の残ってる人で、最後はパレスチナで四世紀のはじめに殉教じゆんきやうしたというんだけど、有名なのは竜退治りゆうちの武勇伝。イコンに描かれているジョルジョ像はたいいてい白馬に乗ってひとりで竜をやっつけている姿だ。リビアのシレナという町をローマ軍司令官ジョルジョが通った時、住民たちがひどく悲しんでいた。

わけを聞くと、近くの湖に巨大なおぞましい竜が棲んでいて、生贄を捧げないと毒を吐き出し大暴れして町を破壊するという。そのあたりにいた羊はすべて竜に食べられてしまった。手ぢかな生贄のなくなった人々は仕方なくくじ引きで人身御供を決めることにした。しかし、そのくじを当てたのは王様の美しいひとり娘クレオドラインだ。姫は町を守るために覚悟を決め、花嫁姿で湖に出発しようとしていた。ジョルジョは心を痛め、竜退治を申し出る。鎧に身を固めた彼は十字を切りキリストに祈った。馬にまたがり湖を目指した。凄惨な戦いの末、見事に槍の一突きで竜を殺してしまう。これを見た住民たちは神の偉大な力を称え、王様をはじめ一万五千人が回心して洗礼を受けた、というんだ。面白いだろう。中世の聖人伝って決してお説教臭いもんじゃなくて、こういうマンガみたいのがいっぱいあるんだよ。ジョルジョも、だから大衆のいわばヒーローだね。ジョージって名前を子どもにつけるときは、勇敢な男の人になりますようにって親の願いもあるんだらうね。

……現役げんえきのときから、ぼくの場合中三のときから、いろんな人にデッサンを習ったけど、石膏像が歴史的な彫刻のコピーで、その元にならず神々や人間のドラマがある、それを知って描くのと知らないで描くのじゃ大違ちがいって、はっきり指摘しってきしてくれたのは小池さんだけだった。

小池さんがまた頭の上で言う。

「ジョルジヨは戦士だったろ。な、神経質しんけいしつそうな顔だけど、ほらこの鍛きたえられた首を見ろよ」

そっけなくそこに置かれた白い乾かわいたかたまりが急に息づき始める。ぼくは若い男の影かげの中の首すじを見つめる。弱そうに見えて実は強い。鉛筆えんぴつで輪郭りんかくを取り直す。角度がピシッと決まる。

「A芸大にはジョルジヨの全身像のレプリカがあるぜ。あれはいいよー。あそこ採光もバツグンだしさ、きれいだぜー。入ったら描ける」

と小池さんは、ぼくらをやる気にさせる。でもこれは、あんまりリキが入ってないかもしれない。大学中退の人が受験生をけしかけても、いまいち説得力に欠けるってあるよな。まあ小池さんが一生懸命予備校の講師を務めようとしているのはわかるから、ぼくらも、そうかあ、A芸大に入りたいもんだなあって顔をしてあげることになっている。

しかし冷えるなあ。この部屋は二〇畳か三〇畳ぐらいあるんだろうか。夏の講習会するときなんか五〇人つめこんだもんな。あの時は暑かったな。夏は扇風機二台、冬はガスストーブふたつ、それ以上の冷暖房装置は使用禁止、これがウノ研のアトリエのきびしい掟だ。きょうは、まだ現役組が現れないから小池さんを入れて七人しかない。寒い。手のひらをこすり合わせる。ハ、ホーと息をかける。

このアトリエと、となりの半分ぐらいの広さのデザイン室、それと事務室と事務室の向かいの長椅子のある喫煙コーナー、それがウノ美術研究所のすべて。研究所の奥

はトイレと水洗い場。デザイン室の向こう、つまり建物全体の南半分は物置と中庭をはさんで二階建ての宇野先生の住居になっていて、宇野先生の奥さんと、娘さん一家が住んでいる。昭和三〇年代の後半に宇野先生がサラリーマンをやめて作ったんだそうだ。あちこち手が入っているけど、中身は建てた当時のままの木造家屋だ。

アトリエは天井てんじょうが高くて東西に長く、西側が入り口。入り口のそばが四畳半の事務所。さっき入って来るとき、宇野先生は接客中だった。アトリエまで時々宇野先生とお客の男の人の下品な笑い声が聞こえてくる。宇野先生はぼくらの絵を見るよりも、事務の方が多し。でも年の功というか教え方はササガでわかりやすい。ぼくらはもつとアトリエに来てほしいと思つてゐる。ちよつとくどいところがあるから、宇野先生の日が続くと、あの糞くそじじい早く死んじまえ、と帰り道にみんなで言つたりもするんだだけ。

アトリエの北側の面が擦すりガラスの窓になっている。直射日光だと光の角度が刻々

と変わるのでデッサンにつごうが悪い、それで北窓にしてあるわけだ。窓からの光が石膏像の斜め上から一定の角度で当たるようになっていて、梅雨時の暗い午後でも擦りガラスを通して光の粒がアトリエを満たし、石膏は乾いた陰影を夕方まで保つことができる。日が暮れると宇野先生の指示で、窓の上に二列にはめこんである蛍光灯の冷たい一本調子の光が点される。そこから夜の部だ。当然光が変わるから、ぼくも作業を変える。ぼくはたいてい帰ってしまうけど、ちがうデッサンを始めるやつもいるし、色彩構成の課題をとなりの部屋ですませようというのもある。となりはふだん座の上に長机が並べてあって、デザイン専用になつてゐる。

アトリエの東西の壁にそつて棚の上に石膏像が、並んでいる。今はこつちにジョルジョ、マルス、パジャント、モリエール、あつちにはビーナスとビーナスの面取り、ラポルト、闘士、壁には大顔面。石膏の種類は週ごとにちよつとずつ入れ替わつていく。春は入り口側が全部ビーナスの面取り、奥に幾何形がずらーと並んでた。ぼく

らはこの部屋で油絵科、日本画科、彫刻科志望の連中と一緒に木炭デッサンを始めた。ぼくらデザイン関係の受験生は午前中は球や立方体の石膏をデッサンし、午後はデザイン室に移ってポスターカラーを混ぜる練習をした。あのころは二浪の山崎さんぐらいしか、こんなジョルジョなんてうまく描けなかったと思う。壁に貼ってある参考作品を見てごらん。下から二番目の列の、左から三枚目。あれが五月ごろかな、小池さんに絶賛された一浪の潤子のニオベだけど、今見ると、たいしたことないもんな。初めは全員木炭デッサンだったのが、デザイン・コースは七月の初めに鉛筆デッサンに切り替わる。デザイン科の入試が鉛筆デッサンなので、基礎の木炭から受験用の鉛筆デッサンに移行するわけだ。

デザイン科は学校によって実技テストの内容がかなりちがうので、静物もコスチュームも描かなきゃいけないし、着彩もあるし、もちろん色彩構成、立体構成なんかもこなさなきゃいけないからけっこう忙しい。今は講習期間の谷間なので課題提出の日

だけ決まっついて自由に時間を使っついていいことになっている。ぼくがつい石膏の前に座っつてしまうのは、デッサンが好きなのかなあ、やっぱり。この研究所に來るまでは嫌いだっつたんだけど。石膏描けないやつは何やつてもダメと言う小池さんの影響えんきょうかも知れない。それに石膏デッサンは上達のレベルがわかりやすいから、やっつと闘士まで來た、やっつとジョルジョまで來た、と難しい石膏に上がるたびに山の頂上をひとつひとつ征服せいふくしていくのに似た充足感じゆうそくかんあるんだ。石膏をのせた棚はぼくらの戦利品陳列台ちんれいだいみたいなものもある。ほら、ぼくの後ろのオレンジのカーデガン、夏から來てる円山やまっつてデブ女なんかまだ大顔面おほがほでてこずつてる。あれじゃS短大やまぐらいしか無理だらうね。

輪郭りんかくがだいたいできると、まず明るいとところと暗いとところのツートーンに調子をつけていく。その後、暗いところをまた二段階に区切る。調子の境目を見つける段階で立体感たいていが出たり出なかつたりする。木炭は広い面の調子びかくてきが比較的楽につけられるけど、

鉛筆は均一な面を描くのがむずかしい。平行な線の積み重ねで調子を出していくんだ。スパルタ方式で有名なK塾なんかは、始めのころ平行線引く特訓ばかり毎日毎日していたらしい。ウノ研じゃ提出課題程度ですんだけど、K塾ぐらいやったほうがいいのかも知れない。最近K塾の合格率が急に上がっていて、こっちからも今年落ちた研究生がずいぶん向こうに流れたらしい。

小池さんはほくの右で同じジョルジョを描いている鈴木すずきの後ろに、すつとまわる。「ちょっと、席かわって」

と、鈴木すずきの椅子にすわる。椅子っていつでも高下駄たかげたの鼻緒はなおを取ったみたいな、風呂呂ふろろ屋の椅子みたいな低くて固いの。代々使われてきたので黒光りしてる。前の列で描くときは、これにしゃがむようにお尻しりを乗せて低いアングルから描く。真ん中の列はパイプ椅子に座る。一番後ろは立って描く。どこがいい席っていうんじゃなくて、いろんなアングルから描く練習をしとかないといけない。受験のときはくじ引きで席が決